第1回 伊東市教育問題懇話会 会議録

- 1 日 時 令和6年8月26日（月） 午後2時00分～午後4時00分
- 2 場 所 伊東市役所高層棟 5階中会議室
- 3 出席委員 7人（篠原峰子委員、飯塚啓太委員、石井照市委員、稲葉雅之委員
関野耕一委員、利岡正基委員、吉田勇輝委員）
- 4 欠席委員 なし
- 5 事務局 教育長 高橋雄幸、教育部長 浜野義則、教育部次長兼教育総務課長
杉山宏生、教育指導課長 森田まり、教育総務課課長補佐 掬川宗範
- 6 会議の経過

杉山次長：定刻となったので開会する。開会に先立ち、委嘱状の交付を行う。

（高橋教育長が各委員へ委嘱状の交付を行う。）

杉山次長：続いて、高橋教育長から挨拶する。

高橋教育長：この度は、伊東市教育問題懇話会の委員をお引き受けくださり、感謝申し上げます。この教育問題懇話会は、教育委員会の諮問に応じ、本市教育行政の重要課題について調査審議し、その結果を教育委員会に答申するという役割を担っている。以前には、伊東市における中学校給食のあり方についてや、伊東市小中学校通学区域のあり方についてを、調査審議していただいた。令和3年4月の川奈小学校と南小学校や、令和5年4月の東小学校、西小学校、旭小学校の統合の際も、この懇話会において調査審議していただき、実現してきたものである。本市の小学生（児童）・中学生（生徒）数の推移は、小学生は昭和54年度の7,422人をピークに減少し、令和6年度は2,015人に、中学生は昭和57年度の3,696人をピークに減少し、令和6年度は1,251人になっている。少子化の問題は本市に限らず、全国的な問題であるが、学校の小規模化が進行し、同時に学校間の規模の差も顕著となっており、今後ますます学校における教育や生活、さらには学校運営など様々な面に影響を及ぼすことが懸念されている。伊東市教育委員会は、子どもたちに対して将来に渡りより良い教育環境を提供するために、「夢と希望を育

む学校」を実現するための教育環境を整えていきたいと考えており、そのためには、委員の皆様の意見が不可欠である。計6回ではあるが、活発な議論をお願い申し上げます。

杉山次長：順に自己紹介をお願いします。

(委員自己紹介に続き、事務局も自己紹介)

杉山次長：続いて、会長の選出に移る。伊東市教育問題懇話会設置要綱附則第2項の規定により、会長が選出されるまでの間、教育長が議長となる。ここからの進行は教育長をお願いします。

高橋教育長：会長の選出とその後の副会長の選出は、要綱第4条の規定により、委員の互選となっている。どなたか意見があればお願いしたい。

委 員：伊東市教育問題懇話会については以前も市議会の代表の方をお願いしていたということを知っている。もしできれば、篠原委員をお願いしたらどうか。

高橋教育長：篠原委員が推薦を受けたが、他に意見はあるか。

(「なし」の声)

高橋教育長：それでは篠原委員を会長に選出することに御異議ないか。

(「異議なし」の声)

高橋教育長：御異議なしと認め決定する。

(会長と席を替わる。)

篠原会長：大きな責任と重責で、緊張感がある。今回もとても大切な教育問題懇話会である。これからの伊東市の子どもたちの教育環境をどうしていくかを話し合う場として、1回1回を大事に、皆様のご意見を伺っていきたい。子どもたちの幸せをベースにしながら、私達が夢と希望を忘れずに話し合いを進めていきたい。どうぞよろしくをお願いしたい。

篠原会長：これより会長の職務を行う。御協力のほどお願い申し上げます。それでは、副会長の選出に入る。自薦でも他薦でも、どなたか発言をお願いしたい。

委 員：続けての発言となるが、以前の教育問題懇話会で稲葉委員が副会長を務

めていたと聞いている。稲葉委員はいろいろなところで役をしているが、引き続きということで稲葉委員にお願いしたらいかがか。

篠原会長：稲葉委員を推薦する発言があったが、他に意見はあるか。

（「なし」の声）

篠原会長：それでは、稲葉委員を副会長に選出することに御異議ないか。

（「異議なし」の声）

篠原会長：御異議なしと認め、稲葉委員を本懇話会の副会長に選出する。選出された稲葉副会長から一言お願いします。

稲葉副会長：ただいま御選出いただきました稲葉である。会長サポートしながら、そして委員としても積極的に貢献したいと思う。よろしくお願い申し上げます。

篠原会長：続いて、議事次第6「諮問事項の説明」に入る。

杉山次長：諮問事項の説明に際し、高橋教育長から篠原会長へ諮問書を手交する。

（高橋教育長から篠原会長へ諮問書が手交される。）

杉山次長：続いてこの諮問をするに至った経緯について、担当から説明する。

（**掬川課長補佐**から資料に沿って説明）

篠原会長：今の説明に対して御質問などありましたらお願いしたい。

（「なし」）

篠原会長：特にないようなので議事次第7「協議事項」に移る。まず、協議に入る前に皆様にお諮りする。懇話会設置要綱第5条第4項では会議は公開を原則としている。特別な理由がなければ本日の会議も公開により行いたいですが、御異議ないか。

（「異議なし」の声）

篠原会長：御異議なしと認め、公開により行う。

篠原会長：議事次第7について事務局の説明を求める。

掬川課長補佐：「夢と希望を育む学校」の実現に向けた教育環境のあり方について、委員の皆様一人一人に語っていただきたい。難しく考えずに、「学校生活を通して、子どもたちに、こういう大人に育ってほしい」という理想と、「その理想に必要なだ

と考える教育環境」について語ってほしい。各委員が持っている理想像について可能な限り共有化を図って参りたい。今後、児童・生徒の人数の話や適正化の方法論で迷うことがあった時に、いつでもその原点に戻ることができるのではないかと考えている。教育委員会として目指す学校像と、その学校像に迫るための指導方針については、森田教育指導課長が説明する。

森田教育指導課長：夢と希望を育む学校を目指す園・学校像として、教育指導課としては、重点目標を連携・協働としている。様々な関係機関と連携・協働しながら、ますます多様性が増す時代に対応した教育の実現を目指していく。

集団で学ぶ学校教育に期待されることは、社会性の涵養である。中央部分にある人として備えたい力のところに、新たに掲げたが、指導面においては、人権教育を重視しており、確かな人権感覚、いじめを許さない心、思いやりの心や、節度ある人との接し方、規範意識や忍耐力、気持ちの良い挨拶を身につけられるようにするとともに、社会性を培うという方針を学校と共有している。また、学びに向かう力、思考判断、表現する力、それから命を守る力、数々の災害が起こる中で危険を未然に回避する力や危機対応力の向上などを目指している。これらの目的を具現化するために、教育指導課として進める園・学校の基盤整備のうちの4点について説明する。

一つ目は、主体的対話的で深い学びの推進である。行政機関として予算や施策の執行を含め、充実した研修、効果的な人材配置など魅力ある学校作りを支援している。

二つ目は、個の多様性に応える柔軟な教育体制の推進である。今日は特別な支援を要する児童生徒、不登校、いじめ、貧困等の課題を抱える児童生徒など学校へは多様なニーズが寄せられており、柔軟な教育体制を確立しなければならないことから、教職員が子どもと向き合う時間を確保することを目的に、支援員の配置等、支援の充実に努めている。

三つ目は、地域とともにある園・学校の体制作りである。現在、対島中学校区と

宇佐美小・中学校区にコミュニティスクールが設置されている。家庭と学校の連携・協働が強化されており、今後も社会総がかりで子どもの教育に取り組む体制を構築していく。

四つ目はICTの活用である。子どもの一人一人が持つタブレットや電子黒板等の整備が進んでいる。教育委員会では適切な管理に努めている。

このような教育の基盤をもとに子どもたちがより豊かに、多くの人との、また地域の方々との、社会との関わりの中で学ぶことができる学校作りを進めてまいりたいという方針で取り組んでいる。以上である。

(資料⑤伊東市教育委員会教育指導課指導の重点に基づく説明)

篠原会長：皆さん、会議に臨むに当たり事務局からお知らせがあったかと思う。学校規模や配置についての議論に入る前に、どういった学校であってほしいか、委員の皆様ビジョン、思いを語っていただきたいということである。今の説明を聞いて思ったことでもいいし、委員の皆様立場での考えでも何でもいいと思う。この機会に、学校教育のあり方について、皆様の思いを聞かせてほしいと思う。

委員：どういうこと大事であるかと考えた。子どもが何かをやるに当たって、諦める状況があってはいけないと思う。今、自分の子どもは北中だが実際できる部活が少ない。そのため、今まで小学校からやってきた運動を諦めてしまう子もいるし、南中や他の学校に行く子も実際にいる。こういう状況がなくなればいいと思う。部活に限らず、普通の授業にしても、北中は、クラス数が少ない。学校での話を聞いていると、実際、学校の中で何かあったときに、1クラスだとクラス替えすることもできない。今1、2年生は2クラスあるが、3年生が1クラスしかない。特段問題はないが、何かあったときに、その子が逃げる場所がなくなってしまう。その結果、学校に来なくなってしまうことがあってはいけないと思う。

委員：私の思っていること、考えていることを述べたいと思う。まず富戸小は、伊東市の中で、コミュニティスクールに指定され、今年が3年目である。学校環境には、学校、家庭、地域、いわば三位一体となった連携と協働が必要であると考え

ている。学校と地域との関係については、今までも良かったが、特にコミュニティスクールができてからは多くの内容が、充実した取組になっている。具体的には、富戸の行事で、祭り、漁業歴史、最近では民宿に1泊して、朝早く定置網の船に乗って魚を取って食べる乗船体験を行った経過などがある。区主催によるコミセンでの太鼓の練習、城ヶ崎のウォーキング等いろいろある。本年度も、先ほど森田課長からも話があったが、コミュニティスクールが設置される、指定をされる学校もあると聞いている。各学校においても、多くの体験や経験を通して、努力することの大切さや、感謝の心、達成感、挨拶する心等も育まれると思っている。やはり私は子どもたちの日常生活において、基本である勉強や運動がすごく重要であると考えている。子どもたちが、一つ一つ達成できていき、その積重ねにより視野を広く持てるように、また、多くの人との交流を通してヒントを得ながら、グングン成長できる大人になってほしいと思う。教育環境の真ん中には、いつも子どもを置く。各学校にはランドデザインがあり、大切にすべきである。以上である。

委 員：夢と希望を育む学校であるためにということであるが、夢や希望というところがすごく前向きな話であり、輝かしい未来を連想させる。ただ、現実的には夢がかなって快適な人生を送っているのか、いつまでも希望が持てているのか、そこはおそらく皆さんが感じている課題だと思う。学校教育を通じて、どれだけ希望が持てるようにしていくか。これからの学校、地域の編成を考えていくためには、子どもの将来的な利益を基準、中心に考えていく必要がある。子どもが健やかに育ち、夢や希望を持って社会で活躍することが、伊東や社会の利益になると思っている。また、学校では、教育的な効果を出すことや、社会性の育成というのが必要であると思っている。子どもに限らず、引きこもっている方、自ら命を絶つ方がいる。未婚率も今非常に高くなっている。その原因が、学校教育にあるとも思うわけではないが、社会性の育成が社会的な大きな課題である。子どもたちが、社会性をもう少したくましく持てるといいと思う。先ほどの資料の説明の中に、いじめを校内で起こさない人として備えたい力の中で、いじめを許さない心があった。いじめをしない

教育ということはもちろん大事である。そして、学校の中でいじめなどを起こさせないことも大事だが、いじめる人や嫌がらせをする人や仲間外れなどは、どこまでいっても社会の中では、ことの大小問わずある。いじめの定義というのは、また共通認識されているか分からないが、その中でうまく対応できる、これが社会性だと思う。学校時代は、守られることは大事で、外の望まない人との関係に対して一定の域を超えたところは守る、おそらく守っている。しかし、人の中でもまれる、嫌な人がいたり、多少意地悪されたり、仲間外れにされたりということはある程度学生時代に経験をしたり、そこで悔しい思いをしたり、対抗していかないとならない。学生時代には先生や親や、地域の人たちがある程度守ってくれるかもしれないが、社会に出ていくと、守ってくれる人がおらず、適応が難しくなり、いろいろな社会における課題に繋がっていくと思う。適応が難しくならないようにするために、学校は、一定の規模、規模化は大事であると思っている。人数がある程度いることによって、学校の中でもまれる。少人数の良さがあることは認めるが、社会に出たときに対応できる力を養うため、ある程度の規模の中で人間関係にもまれる状況を、学生のうちに経験をさせておくことは、優先すべきであると思う。規模化、規模の確保が大事であると思う。

委員：各校の独自性、地域性がものすごく大事だと思う。先ほど富戸小の話があったが、地区ならではの教育はとても大切である。南小の保護者は、川奈出身の保護者がかなりいるが、川奈小時代の話をよくPTAの会合です。川奈大漁節を1回南小でやりたいとか、海の活動を取り入れたいとか。よく皆さんおっしゃるのは、小学校時代の経験が非常に生きているなって。それが今回の統合とどう関わるかは別にして、伊東市にある小学校は、それぞれの独自性をもっと出すべきと考えている。例えば、山の学校、町の学校、海の近くの学校それぞれあるが、もつともつと独自性を出せば、子どもたちはその学校に思い入れが強くなり、伊東が大好きな子どもが育つのではないか。育った結果、中には伊東を飛び出して、伊東という小さい枠よりもっと広い枠でいろいろな人との交わりで、より自分を成長させたいとい

う思いが出てくるだろうし、中には伊東に根付いて、伊東をもっともっと深く理解したいと思う子どももいるだろう。他の地域から伊東市に来る方との交わりにより、形成される人生もある。いろいろあるが、大元は地域を好きにならなければならないし、それが小中学校時代ではないかと思う。その他には、学びの場と活動の場の担保が学校には絶対必要だと思っている。特に学びの場の担保というと、普通に学校に通っている子もそうだし、特別支援級であるとか、不登校であるとか、また今規模の話も出たけれども、いろいろな規模、学びが担保できる場をどのように構築していくかというのは、大人の役目であると考えている。部活でも、活動の場の担保をどのようにしていくか。校舎の老朽化の問題と今後校舎をどこに作っていくか、通学方法の問題、様々な問題が加味される。根本は大人の都合による統合ではなくて、子どもを中心にした子どもにとって学びの場が担保できるか、子どもにとって、活動の場が担保できているか、これが非常に重要になると思っている。以上である。

委員：先ほど申し上げたように子どもが池小なので、小規模校がいいとずっと感じながら暮らしてきた。教育についても、PTAの活動を通じていろいろな話を耳にする機会が増えてきている。特に最近では、多様性というキーワードがすごく出てくる。子どもたちがいろいろな経験をしたり、いろいろな人と会える機会を増やすことを考えると、小規模校で育つメリットもあるが、子どもたちの幅が狭くなってしまっているのではとすごく感じている。これは実は親も同じである。すごく小さいコミュニティの中ですごく親しくするので、深い付き合いがあり、いいなと思う部分もありながら、中学になったときに対島地区の対島中学校に行き、地区でいちばん規模が大きい八幡野小の父兄と会うと、子どももそうだが、親ですら、一気に物怖じするレベルになってしまう。その時点でやばいと感じてしまう。ということは、子どももそういう状態の中で対抗していかなければならない。頑張っただけで対島中学校で生活し続けなければいけないと思うと、できる限り、親も含めていろいろな方と接する機会を作るということはすごく大事であると思う。池は、こんなに小さいのに、地区の独自性を持っているということは本当に素晴らしいと思っている。対島

地区で富戸と池だけでも全然違うし、もちろん八幡野も違う。例えば、これが統合したとしても、子どもたちで経験できるものが広がるというふうに考えれば、対島地区の中で経験できるものを増やせ、人との出会いも広がると言えると思う。小さい学校がずっといいと思っていたが、ある程度早い段階でと思う。ちょうどたまたまだが、8月23、24日の金土で日本PTAの研究大会があった。伊東市から2人選出ということで私も参加させていただいた。その中で、多くの学びがあった。初めて聞いてびっくりしたこともあった。その話を若干すると、先生方も把握しているかもしれないが、小学校2年生が一番いじめの報告が多いと。私は初めて聞いてびっくりした。次に多いのが3年生で、次が1年生。結構なPTAの代表者が来ていた。中2だと思ふ人とか、中1だと思ふ人が多かった。小学校の低学年でいじめが多いというのが衝撃だった。ということは、低学年でいじめにあって、学校に行くことができなくなる子がたくさんいる、という現状を聞いたときに、多少伊東市の数字と全国の数字が違おうとしても、世の中がそういう傾向ならば、学校に行くことができなくなった子どもにも学びの場を、きちんと維持していかなきゃいけないと。いろいろな学び方があって不登校になってもちゃんと学びの場が提供できることは重要であるし、今だとICTを活用してということであれば、勉強だけは何とかついていけるようになる。どこかでいろいろ適応できる場を確保しないと。大人は、会社が合わなかったら辞めてしまえばいいという発想にもなるが、子どもは絶対ならない。学校にも行きたくないが、学校に行かなきゃいけないとなってしまうと本当に子どもの環境が守られなくなってくる。そういう意味で、多少学校の大きさもあると、クラス替えもあり、逃げ場というか、子どもが守られると思った。もう一つは、資料の教育指導の重点にもあるけど自己肯定感である。これもちょうど今回の研究大会テーマになっていた。今の日本の小・中学生のたった10.4%しか、自己肯定感を持ってないというアンケート結果があった。先進国の最下位らしい。これも結構衝撃であった。自分自身に納得し満足していない、満足できないというのはすごく寂しいことだと思っている。これは、大人がすごく影響している。大人

の自己肯定感が下がっているという話も出ていた。すごく自分自身いろいろなことを感じ考えさせられた。子どもの自己肯定感を上げるのは、結局大人がそうになってくなくてはいけないと思う。少し話がそれたが、やはり子どもたちの環境を作るには大人の環境も合わせて作るという学校の環境整備が非常に重要であり、それが将来の子どもたちを守ることになると考えている。以上である。

委員：まだ25歳で3年前まで大学生だった。3年前に社会に出て、もっとやっておけばよかったと思ったことがある。自分も他の人ももっと大切にできるように、勉強だけではなく、いろいろな経験をしておけばよかったとすごく思っている。仕事柄、いろいろな支援が必要な方や、本当にいろいろな価値観を持っている人がいると感じている。その人の価値観に対して自分の価値観だけを当てはめて、接してしまうこともある。それぞれの人が大切にしているもの、そうではないものをしっかり分かるように、大学生のとき、今までの学生生活のうちで分かっておけばよかったとすごく思っている。自分も大切に、相手も大切にというのが、両方ともできてないと、どっちかが駄目になってしまうとすごく思っている。だから、もっといろいろな価値観、人の考え方に触れることができるようにする必要があると思う。私が八幡野小だったときは2クラスだった。ちょうど良い人との距離感だったと改めて今は思っている。今、1クラスの学校が結構多いというふうに読んだが、6年間ずっと一緒の人がいてクラスが変わらないというと、本当に関わりたくない人にも嫌でも関わらなきゃいけない。その中でも人数が少なくなってくると、すごく小さいグループしかできなくて、その中で仲間外れにされてしまう。そうになると、6年間ずっとそのままつらい思いをし続けて、嫌になってしまうと思う。ある程度の人数の確保ができていて、それが6年間、少しずつでも変えられるような規模感が良かったと思う。

委員：私は、学校というものをずっと教員の立場と保護者の立場から見てきて、柱にするべきは子どもの幸せ、また子どもの健やかな成長であるとずっと考えている。このベースを外さなければ、いろいろなことをやっても、失敗はあってもいい

のではないかと思っている。社会情勢の変化は本当にめまぐるしい。皆様も心配しているとおりに少子化がまず第一にある。話題にも出たが、多様化で不登校の子が増えたり、いじめも増えたり、また支援が必要な児童生徒も増えている。こういう状況で、学校の先生になりたい人が減っている。本当に大事なものは、人材であり、必要な最大の教育環境を作るのは人だと思う。素晴らしい先生はいっぱいいて、その志の高い人材がいれば、子どもたちは健やかに成長していくと思っている。しかし、その人材が今とても不足している。学校の先生は足りない、子どもが減っている。こういう中では、皆様と共通の意見だと思うが、ある程度、統廃合というのはもう致し方ない状況であると感じている。これから何回か皆様と協議をしていくが、いろいろな意見を出すこともすごく大事だと思う。それと、いろいろな自治体の成功事例を学べたらと思う。皆さんの中でも、集まるときに他の自治体の成功事例を材料に持っていただけると、話も膨らませていけると思う。本当に根本的に変えていかなければいけない部分もある。国や県の方針があり、その中に伊東市がいる。どういうところまでできるかと思うが、伊東市の子どもたちのために皆さん一生懸命これまで関わってきた方たちなので、自由に話しながら、現実の数字を事務局に聞きながら、話を進めていきたいと思う。

篠原会長：皆さんからそれぞれお話いただいた。ほかに何か意見があるならお願いしたい。

委 員：委員になって、伊東市全体のことを考えなければならないのは当然であるが、これは一つの参考事例として申し上げる。今年の6月5日に市長のタウンミーティングがあった。その中である母親が、富戸は昔から祭りとの結び付きが強いと。先ほど郷土芸能について大事だと話した。もし統合した場合には祭りや郷土芸能はどうなるかという考えがある。タウンミーティングである役員の男性が、もし統合だったら私は先頭に立って反対署名行おうという意見も出た。そういう意見が出て、市長も十分地域性について考えていくという話は最後にしていった。このような意見が出たことを考えると、話合いの場を設けて議論をよくしていかないと。区民

を説得するということが、区長の立場として大変重要でないかと思う。同じような意見はかなりある。今後、私自身もさらに理解を深めながら意見を述べたいと思っている。

委員： 富戸地区の地域コミュニティスクールについては、私もいろいろ聞いている。本当に特色のある形であり、とても魅力的だと思っている。地域の良さを大事にし、各学校の良さが地域コミュニティスクール中で可能になってくると思う。今、宇佐美地区の導入状況は。今年からか。

森田教育指導課長： コミュニティスクールとしては、この4月からである。様々な学校行事では宇佐美地区が元々協力しながら一緒に作り上げてきたものもある。そこを評価しながら新しい取組を考えていくというところである。まだ会合は1回だけである。

委員： 学校は、先ほども言ったように人材（人員）が本当に不足している。学校の先生って本当に忙しい。やらなければいけない事務的なことがたくさんある中で、子どもと向き合う時間をどれだけ確保するかっていうのが大事になってきている。それと同時に、その地域の人とどれだけ学校が門戸を開いて地域と混ざり合うかは、大事であると思う。池小は、それが割とできている気はする。

委員： そのとおりである。本当に地域と学校の繋がりは深い。今の石井区長の話も同じように当てはまると思う。だから、どの地区もその地区の例えば伝統とかを考えたりすると、統合したいか、したくないかとなると多分したくないと絶対になる。統合しつつ、今までの文化を継承するか、その地区をどう守るか。統合したら守れなくなるという発想が多分当然である。そこは、私も移住者でありながら、例えば宇佐美の小・中学校が市街地とくっつくことを簡単に考えると、くっつけられるのかとやはり思う。ただ、その考えでいくと、多分何も進まなくなる。その地区の本当に大事なところは残しながら、学校教育としては一緒になることをやはり考えていかないと。なかなか難しいと思うが。例えば、対島地区が3校統合になったとしても、地区のそれぞれの今までの伝統というのは、活かせるような状態、そ

れがなくなってしまうという話ではなく、活かせるようになればいいと単純に思う。

委員：伊東小に統合されたときに保護者、地域の人からいろいろな意見が出た。こんなに否定的な意見がたくさん出るというのは私も想像していなかった。やはり、新しく何かができるというとき、掲げているその夢と希望がどれだけあるかを理解してもらい、そうだったら通わせてあげたいと保護者が思うものにしていかなくてはならない。理想ばかりになるが、そういうものをどれだけ作れるのか、またそれをアピールできるかだと思う。北中の問題、子どもがすごく少なくて、特に部活動が深刻だとおっしゃっていた。北中の中で保護者の声として、どのような声があるか。いろいろ聞いていると思うが。

委員：昔ほど北中学区だからということで、学区変更も厳しくはなくなっている。学区変更も昔に比べてやりやすくなった。保護者の都合で、職場の関係で住んでいるのはこちらだけど、子どもは別に通わせることもある。それはそれで、自由に動けるのはいいとは思っている。ただ、子どもが小学校までみんな一緒だったのが中学校から別になっているのは、かわいそうかなと思うところもある。やはり部活が少ない。昔に比べても全然ない。今運動部が、男子がテニス、バスケ、バレー、女子は、ソフトテニスだけで、あとは美術と吹奏楽と全然選択肢がない。中体連の前、各学校で壮行会をやると思う。たまたま行く機会があった。各部でみんな集まる中、校外部活でよそに行く子どもが半分ぐらいいる。それも、各学校の中でできればいいと思う。例えば野球をやりたいから他に行くとか、バスケをしたいので他に行くとなると、交流が減ってしまう。みんなできれぱと思う。

委員：北中は伊東小の子どもが行くのか。

委員：基本、西小学区の子たちだけである。あとはその保護者の都合で、よそから来る子もいたと思う。逆に出てしまう子もいる。

委員：普通は、小学校がいくつか集まって中学校ができて集まるイメージなのが、北中は伊東小から分かれてしまうというのが保護者の声として問題に上がったのか。

委員：そのとおりである。実際まだその統合したばかりだから、今後の流れは分からないが、北中に来る子どもたちがどれだけ湯川松原地区でいてくれるのか、その学校（小学校）の中で仲良くなった子が部活で陸上をやりたいとなると、やはり南中に行くと思う。今後どうなっていくか。

委員：部活動は今年度から入る、入らないは自由になったのか。

森田教育指導課長：そのとおりである。元々必ず入るようにはなっていなかったが、なんとなく親の世代から部活動に入るという考えがずっとあったので、そんな理解をされていた。必ずしも部活動に入らなくてもいいという確認として、改めて保護者に周知したところである。

委員：部活動のあり方は、地域移行期間であるので、その渦中にいる子どもたちが本当に大変だと思う。

委員：実際、資料（基本方針）に記載のある平成30年から5年経って、当時あった部活もなくなっていると思う。北中は野球部があるとなっているが、確か野球部もない。南中と、対島と門野は合同チームになっている。3つ単独でできるほど子どもはいなくて、何とか合同チームで維持している。当然この後も減ってくるので、なくなっていく。ここから増えることは多分ないので、このままいくってことだと思う。

委員：以前、熱海地区の野球代表に関して聞いた。全部の中学校何校かある中で合同チームを作り、その1チームが熱海市の代表校で、東部の大会に出ている。

委員：部活動のあり方をどうしていくか、子どもの人数が減ってくる中で、合同部活動をどう取り入れていくかという話を多分されていると思う。先ほど活動の場の担保と言ったが、今後子どもの数が減っていく中で、やはり伊東の子どもたちが自分の学校にないから、諦めるというよりは、例えばもっと広く伊東を捉えて、伊東は西と東に分けていこうとか、最低限の形ででも残していけたらと思う。それが夢と希望に繋がると考えている。それが簡単にいかないことは分かっている。それこそ我々や地区の人や市教委、いろいろなところが力を合わせながら、良い方向

を模索していければと思う。あともう一点は、今いろいろお話を聞いていて、この統合がマイナスマイナスの統合になってはいけないと思う。ウィンウィンのイメージで。富戸で地域学校協働本部や運営協議会を立ち上げたとき、学校の中にも地域の人がいっぱい入ってきてくれたし、学校の先生たちも助かった。地域の人たちも子どもたちが来るから、活性化にも繋がる。ウィンウィンの立場であれば、誰かがどこかで多少労力を必要とすることになったとしても、問題ないと思う。統合したら地域のものが全部消えてしまって、学校が残ったら大人数のクラスはできたけれども、それ以外のものがなくなってしまったというのは一番避けたいケースである。ウィンウィンになる方法を話し合いながらみんなで模索していけないかなと。すごく難しいのは分かっている。例えば統合したことによって、部活のなかった子どもたちが部活ができるようになるであるとか、徐々にさびれていった地域の行事が統合で再生し、地区に戻ってくる人が増えたりとか、地区以外の人も参画することで地域がもっと盛り上がるとか、今後の方策が進んでいくと夢と希望ができてくるのかなと。これは簡単にできないことはよく分かっている。

委員：統合した方が良かったとなるように。

委員：そのとおりである。仮に統合しなかったとしても、例えば伊東市の学校全て選択制にしたら、少なかった富戸小の子どもは少し増えた、逆に失礼だが池小は子どもが増えなかった。だから池小は、統合したら大きな人数で学べるようになり、池のお米作りにも八幡野の子が来てくれるようになるかもしれない。これは、そんな簡単にはいかない話であるが。結果良かったというイメージで今後進めていけないかと。難しいのは分かっている。今日は、自由に発言をと言ったので自由に述べている。マイナスマイナスよりもプラスプラスで足し算をしていって、みんなが良かったというイメージが夢と希望に繋がればと思う。

委員：今、自分が住んでいる地域の学校に行くのが基本で、特別な事情があったら他の学校に行ってもよいというルールだと思う。選択制にするということは、それをなくすということか。

委員：一例として、申し上げただけである。例えば、池小の特認校というものを広げてみる。やっぱりやめて、統合してみる。統合しても、地区の独自性が残せるための仕組みを作る。無責任なことを言っているのは承知している。ただ皆さんがいろいろなことが終わった後に、統合をして地区も良かった、保護者も良かった、学校も良かったと思えるように。この先どうなるか分からないが、これからこの学校が変わっていく、伊東市がこう変わっていくことで、何か楽しみだ、みんなで手を携えていこうという方向に進んでほしいといろいろなお話を聞いて思った。

委員：すごく賛成。その通りだと思う。

委員：学校の教員不足は解消されるか。

委員：聞いている話だと、大卒の先生のなり手がいない。それが一番の原因である。これから何年か経って、一定の落ち着きを見せるのではないか。これも夢の話であり、みんなに笑われるが。伊東に戻って先生をやりたい、この地区に行って海の学校のことをやりたい、山のことをやりたいといった伊東が魅力のある教育環境になったら、もしかしたらよそから先生も来るかもしれない。何年か先を見たときに、伊東出身の子どもたちがもう1回あの学校でこんなことやってみたいと思えるようになってほしい。それが人材不足の解消に繋がると思う。1年や2年でうまくいく話ではないので難しい。今理想しか語っていない。例えば、伊東の給料は他の地域より倍であれば伊東に来る人もいるかもしれないが、そんなことは簡単にいかない。特効薬はないような気がする。個人的な感想である。

委員：実際問題、今、伊東市の小中学校の先生は、地元の人が多いのか。伊東や熱海の人が多いのか。

委員：何パーセントかは言えないが、伊東から毎年市外への異動は10数人である。市外から来て伊東に根付いた方もいるし、伊東出身者もおり、いろいろな方がいる。一定数は伊東にいて、一定数は伊東から出ていく。他の地区に比べると出て行く人は多いと思う。例えば、西部出身の方が伊東にやってきて、何年か経ったら地元に戻る。純粋な伊東出身の方は、そんなに多くはないが、結構な数はいると

思う。半分以上はいるのではないかというイメージはある。

委員：社会性をたくましく持てるための教育で、一定の規模感は大事だというお話もされていた。先ほどいじめの数の話もされていたが、いじめの現状について学校現場での立場でどう考えているか。狭いコミュニティだと逃げ場がない。そういう意味で一定の規模感があった方が逃げ場もあるし、大人数の方が鍛えられるというお話もあった。

委員：それについては、大きければいいということじゃない。規模の適正化については、伊東市でもずっと話し合われてきた。幼稚園もそうだし、小中伊東市立のことについて、私も9年ぐらい前から会議に出てきた。大きければいいわけではなくて、適正とは何か、目の届くことが必要だから、逃げ場が必要などいろいろなバリエーションが組めるかどうかについて話し合われてきたと思っている。統合がどうあるべきかという基礎的な考え方は、話合いの中で作られていったと理解している。大きければ良いわけではないっていうことがある。さりとて、先ほど小学校2年にいじめが一番多いっていうのは私もよく知らなかった。年代によってのいじめの形、防ぎ方というのは多分違うと思う。専門家の人たちを前にして申し訳ないが、つまり、大人の関わり方、関わり具合の頻度や時間がそれぞれの年代によって違ってくると思う。そのいじめの定義が本当に私としては共通認識されているかどうか少し心配であるが、いじめと言われるものが小学校2年で多いとするとどんなことが行われているのか、中学3年で行われるものと比べてどちらが危険なのか、命を落とすのか、体に傷ができるほどのことが行われるかというところ、いじめの程度は同じではない。その年代によっての把握や対応の仕方が必要であると思う。しかし結局のところ、学校の先生は、わずかしか子どもに関わらないわけで、大半がやはり家庭から出てくる問題である。つまり、遺伝や家庭の環境の方がよほどいじめその他の課題的な構造に対する影響は、大きいはずである。その学校の教育が良くない、もっとこうしなければというのはあんまり言ってもしょうがないと思う。一定の激しいいじめが行われて子どもが決定的に傷つくことや、学校に行かなくなる

ことを防ぐことで割と精一杯ではないかっていう学校の現状もすごく分かる。だから、防ぐことをしやすくするために、適正な規模を考えるべきだと思う。小学校2年のときの、先生たちの関わり方は介入具合が少し多めにした方がいいだろうし、もう少し年と共に心も強くなっていくなれば、ある程度遠くから観察をしながら、あんまり介入のタイミングを早めにしないうように多分しているのでないかと。社会に出ていくときには、面倒を見なくても行けるようにしていく。そうなると、幼稚園や小中の連携も必要だとも思う。規模の話から少し離れたが、そんなふうに考えた。今までの市の議論を何年も前からと聞いていると、私と同じような意見は割と多かったと思う。

森田教育指導課長：小学校2年生になると、子どもは一定の学校のルールを学ぶ。そして、だんだん自我が出てきて活動も活発になる。いじめは、本人がいじめられたと思えばいじめであり、学校では本人が感じていることをつかむためにアンケートをしたり、定期的な聞き取りを行っている。アンケートでの訴え方のルールっていうものも2年生ぐらいになると理解してくる。そうすると、僕いじめられたとか、叩かれたとか、こんなことがあったということを、子どもが発信するようになってくる。それが盛んにできるようになるのが2年生であり、いじめの件数が多くなるということは予想できることではある。大人から見るとそれはいじめかと思っても、そこは子どもが自分のことをきちっと表現できて発信できたことであり、報告でもいじめというふうに捉えてあげる。その代わり経過がどうであったか。例えば1か月後にまだ困っていないか、2か月後にどうかということを見て、大体3か月後に特に問題が起こらなくて、本人に聞き取りした様子を見て、解決されたと考えられる場合は、いじめ解消という件数になってくる。小学校の場合、いじめの認知件数も多いが、解消の件数も多いということになる。数だけで見れば中学の方が件数的には少ないけれども、なかなか難しく、水面下で進んでいる場合もあるので非常に慎重に解消がどうかということを見ていくわけである。いろいろな要素も絡んで、2年生が多いのは、そうだろうと思う。その中で、いじめられたらどうやって

仲直りしていこうとか、自分は友達に対してどうかとか、お互いにどうかとか、子どもは学んでいく。仲直りの仕方や、いじめが起こらないためにはどうしたらいいのかとか、こういう嫌だった気持ちの友達がいるから、いじめが起こらないクラスにするにはどうしたらいいのかということと一緒に学んでいく。先ほどたくましく育つためにはいろいろな経験が必要であるとの意見があった。学校教育の中では、そういう機会を捉えて一緒に教育していく。その時の学校の規模であるが、規模が大きい学校は、教員の目も多く、多くの大人の目があるということで、より正確によりきめ細やかに観察して捉えていくことができる。それから教員もチームであり、人が多い方がいろいろ相談体制を作りやすい。ただそれは、大きければ良いというものではなく、やはり大きいなりに今度は隠れてしまう部分も出てくる。一概にどちらが良いとは言えないが、教員としても協働しながら、教員同士で協力しながら解決する、子どもも話しやすい先生と話しにくい先生がいるので、規模が大きい学校は大きいことをメリットに変えるような指導方法をやはり工夫すると思う。小規模の学校は、人数的には限られるけれども、より親身に関わるにはどうしたらいいか、学校の力を生かすよう、それぞれ工夫しながら学校教育を進めていると思う。

委員：小学校2年の状況と中学校の状況も深刻度合いは違うと考えると、数字だけでは判断がしづらい。

森田教育指導課長：そういうことを学んできて中学生になると、自分たちで解決できる問題が増え、小学校でも高学年になると、これは自分たちで解決できるからいいとなる。年齢段階での子どもの成長、学びというものがある。

委員：私が教員をやっていたのが35歳までで、もう19年も前になるが、そのときに、スクールカウンセラーが入ってきた。当時はまだ、スクールカウンセラーは、すごくアウェーな気持ちだったと思う。学校って学校の中だけでその時何でも解決してきたし、何でもやってきた。その中に全然知らない外部の人間が来るっていうことへの拒否感がすごくあった。今スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、サポートスタッフ、今進めている地域コミュニティスクール、部活

動の地域移行も進んでおり、外部の人がどんどん学校に入ってくる、垣根がない状況になってきているが、学校は今、壁はないと捉えているのか。

委員：学校は、壁はないと捉えているところが多い。でも正直、外部の人からすると、その壁が高い。学校の先生たちは極力低くしていますと言うが、やはり他の人たちが学校に一步足を踏み入れるための勇気が必要であると思う。そこが完全に払拭できていないと、正直なところ思う。以前に比べれば学校側も極力壁をなくそうと思って努力している。それでも保護者からすると職員室のドアを開けたときのあの空間は、やはり緊張感があると思う。どうしても子どもの守秘義務やプライバシーのこともあるので、完全にオープンにしていつでもどうぞとは言えないが、校長室はオープンにしてどんどん来てもらって構わない。以前に比べれば、学校に来てください、フリーですよと。壁を低くしようと努力している。

委員：やはりまだまだ壁は、保護者側としたら感じる部分はある。プライバシーに関することは言えないし、全部本音で話せないというのはもちろんあると思う。保護者としてはまだまだ壁があるけれども、これからやはり開かれた学校、地域の人と学校が壁をなくした状態で交流し合うことがすごく大事だと思う。そのことを感じる人が多い。

委員：統合をするときに旭小、西小がなくなった。昔からあったので、近隣の人たちから結構反対があったという話もあった。その反対は、子どもの頃からずっと西小学校の近くで、学校があるのが当たり前で思い出もたくさんあって、なくなるのは残念だという声であり、当然である。学校が一つのコミュニケーションの中心の場でもあったし、地域の行事も行われた。最初は学校がなくなり、使わなくなることには反対していても、最終的には皆さんは承認してくれた。多分、伊東の人たちは、そういうところはある。子どもの利益のためだから、協力してくれと言うと理解をしてくれる。今後進めることについても子どもの利益のために、このぐらいの規模が必要で、こういうふうになるということだからぜひ理解をとしっかり正直に言うとう理解してくれると思う。私が西小に通っているときに、人数が多すぎて旭

小ができた。子どもたちが一気に抜けてクラスが少なくなった。北中に通っているときか、卒業したぐらいのタイミングで門野中ができたと思う。今とは逆で、子どもがどんどん増えていった。荻や十足の人たちはバスで北中に通っていた。それが門野中ができて、荻や十足の人たちは楽になったと思う。例えば、北中がなくなると、今度は北中の人たちが他の中学に通うことになる。過去にはそうやって、人口の増減に応じて学校が増えたり減ったりしてきたということで、特別なことではない。それよりも優先すべきは、子どもたちの教育環境としてどうなのかである。あくまでもそこについて、誠実に議論を進めたらいいと思う。この適正規模を維持するための議論は以前から行われて、いよいよ本当に待ったなしである。大げさかもしれないが、何とかしないと手遅れになる。8年ぐらい前の議論で宇佐美は小中一貫校にするかどうか、対島地区はどうするか、北中はどうするかも議論には上がっていた。その後川奈小、旭小や西小の統合が行われてきたわけだが、部活がやりやすいかどうか等よりも、規模による影響というものがもっと大事だと思う。アンケートもかつてはたくさん取った。PTAで保護者のアンケートも取ったりもした。賛成ばかりじゃない。やはり通わせるのが少し大変という意見もある。親としては当然である。ただ、通わせることの都合よりも大事なことはあるということで、そのときのPTAの中でもまとまったと思っている。だから、本当に頑張って進めていただきたいと思う。子どもの将来的な利益にぶれずに確実に進むべきだと思う。

委員：地域の行事には校長に来てもらうことで、地域と学校が接点を持つ、交流を持つことができればいいと思う。地域には郷土芸能に対する強い思い入れがある。そこも含めていろいろ進めていかなければならない。

委員：統合になったとしても富戸独自の活動を守りながら。他の地域の人も交え合わせていければ。

委員：やはり富戸の独自性、他の地区でもそうだが、独自性が強みを発揮できるよう各学校と対応していく。私もそれに地道に取り組んでいきたいと思っている。

委員：先ほどの私の意見の補足であるが、待ったなしで進めるっていうのは必

ずしも統合を進めるべきだということではない。私は、西小や北中に通っていた。マンモス校だったが、その当時から川奈小や富戸小は少人数だった。大池小もすごく少なかった。そういう子たちが大人になって、社会でネガティブな人生を送っているかというところと全くそんなことはない。むしろ活躍している方が多いような気がする。小さな小学校で育った子たちが、必ずしも不利ではないというのも思い出すとそうである。現代に当てはめてどうかというと、環境も違うので分からない。地域の結びつきも強くて、学校以外で育まれるところもあり、小さな学校で大規模な学校で得られる社会性を補うようなことが行われているのかもしれない。小規模だから統合するべきだと、必ずしも思っているわけではないということだけは申し上げておきたい。そこだけは補足させてほしい。

篠原会長：20代の貴重な若手の意見をまた聞かせていただきたい。

委員：学校教育や地域の方、実際に携わってきた方がいる前ですごく失礼な話になるが、自分自身が小中学生だった頃に、地域との繋がりはなんだったかと今思い返すと、1個も出てこない。1個もは大げさかもしれないが、祭りに参加したことは、なんとなくあったような気もするし、出てないのかもしれないぐらいの記憶しかない。実際に今地域でやっていることと、学校と地域の関わりって具体的にどんなことがあるのか、全然イメージができない。どんなことがあるのか。

委員：学校によって違うが、八幡野小はそんなに繋がりがなかったかもしれない。その後、例えば地域の祭りに出たり、スキューバダイビングをしたり、地域の育成会で、お寺で寝泊まりをしたり、いろいろなことが今徐々にできつつある。他の地域では、富戸小学校の話の中で出たお祭り、スキューバダイビング等の海の活動、池小で言うと、稲作り、マラソン大会、宇佐美地区でもコミセン祭りやいろいろなもので繋がりがあがる。場所によっては学校から作品を提供して、コミセンに飾ってもらったり、賞品をいただいたりする関係もある。学校にボランティア的に来ていただいてお飾りを作ったり、学校ごとに違うがいろいろな繋がりがあがる。その時代や学校によって、あまりないケースも確かにある。私は南小の校長だが、南小

学校自身はそんなに地域との繋がりはない。川奈小の子どもの方があったと思う。今言ったように、対島地区は比較的ある。宇佐美もある。伊東小は、今どんな具合になっているか分からないが、いろいろな形で例えば清掃活動、ボランティア活動等の小さな繋がりはある。何をもって強い繋がりがあるというかはなかなか難しいところである。

篠原会長：他に意見はあるか。

委員：既に統廃合した3校、川奈小、西小、旭小、現状空いている場所である。今後どうするかというのは、みんなが言っていると思う。今後どうするのか。川奈小は、かなり時間がかかっている。子どもが2人とも西小出身だが、やはり何も無い状態を見て寂しいようだ。活気のあるものが早く決まってくれればと思う。

浜野教育部長：統合によって空いた学校については、川奈小は、プロポーザルにかけて民間に貸し出す方向で動いている。西小は、今の段階でどうするか決まっていないうが、当然考えていかななくてはならない。小学校中学校だけでなく、幼稚園も廃園で空いている。市役所全体で考えていかななくてはならない問題である。教育委員会だけでなく、資産経営課という市の資産どのように活用していくか検討する課もある。市民の皆さんから見るとかなり遅くてスピード感がないと思われる部分もあると思う。徐々にではあるが、活用についてはしっかりと進めていきたいと考えている。

委員：すごく皆さんから良い意見があった。結局、子どもたちの利益のためというのがベースにあれば、多分いろいろ議論をしてもそこに立ち返ればいいし、いろいろ方を今後説得するとき、そこに立ち返れると思う。小規模校出身だけど、立派になっている方もたくさんいる。それは、私達も地域の方といろいろ触れたらよく分かる。素晴らしい地域の方がたくさんいらっしゃる。それに関しては全然否定するところでもない。適正化を進めることの意義は、子どもたちの利益のためで、進めればいいし、2年、3年で結果が出ましたには当然ならない。子どもたちの利益をベースに、私達の身の回りの方を説得、理解を得る活動をしていくことが必要

であると皆さんの意見を通じて感じた。

篠原会長：すぐに結果は出ないかもしれないけれども、未来の伊東のために、今の子どもたちのために、また何ができるのかということ、未来の伊東の姿を見据えながら、これから話合いを進めていきたい。たくさんご意見いただきまして感謝申し上げます。議事次第7を終結したいと思う。事務局は今後答申書をまとめていく際には、今のやりとりを整理し、目指すべき学校環境として盛り込んでいただきたい。

篠原会長：議事次第8「次回開催」について事務局の説明を求める。

掬川課長補佐：第2回は10月1日の火曜日午後2時から、この会議室で開催する。この場で第3回の日程調整を行い決定したい。

（委員に候補日の説明し、第3回は11月11日の月曜日午後2時から7人全員出席で開催することを決定する。場所は市議会委員会室になることを報告する。）

篠原会長：2時間、皆様にいろいろな議論を聞かせていただいた。今後も楽しみに進めていきたいと思う。次回に審議する内容についてはまた通知をするのか。委員として事前に準備することはあるのか。

掬川課長補佐：事前に資料を作成して郵送する。委員の皆様準備していただきたいことがある場合は連絡する。また、今後調査審議をお願いしていく中で、委員の皆様が欲しいデータがあれば可能な限り準備するので、事務局まで連絡をお願いしたい。

篠原会長：これをもって本日の議題は全て終了した。御協力に感謝申し上げます。以上で本日の会議は閉会とする。

以 上